

反障害通信

26. 9. 18

195 号

反省・撤回・謝罪もない、仕方も知らない、知ろうとしない政治

今、建築工事などが、塗料の溶剤に使うシンナー不足で、工事が進まないという事態も起きている、深刻になって来ているという話が出て来ています。これを、マスコミがちゃんと報道しないので、トランプ・ネタニヤフの仕掛けたイラン戦争で、ホームズ海峡海上封鎖から起きてきている一端だと思っていたのですが、どうも、中国が高市首相の「台湾有事発言」での経済制裁で、シンナーが軍事的武器材料の一端であるとして、中国側の制裁品目に入っていることから起きているとの、分析が出ています。

高市首相は政治家以前の人間関係の基礎の「反省・撤回・謝罪」ということも判らない

高市首相は、就任直後に、訪中し「戦略的互惠関係」という標語を相互確認して、靖国参拝も封印してそれなりに順調に滑り出したのに、新しい政権が出来たときの儀式的なこととして、過去の政権の路線を継承する確認的質疑として、野党から出されていることに、そのことが判らぬ一年生議員でもあるまいし、突然、只の極右議員時代の過去の封印すべき持論のようなこととして、「台湾有事は日本の有事」などと国会の場でしゃべり出したのです。質問した側が驚いて、撤回を求めたのに、事の重大さを理解できなかったのか、撤回せず、翌日に別の議員からも同じく撤回を求められたのに、まだ撤回せず、後にやっと「過去の政府の見解を踏襲します」という主旨の発言をしました。そもそも「覆水盆に返らず」という諺もあります。事は、首相をすぐ替えるしかない事態になっていたのです。反省もない言葉だけの、しかもはっきりした「撤回」の発言もないと、「撤回」にはならないのです。そんなこともわからない政治に対して、中国はレアアースや軍事技術に転用される物品の輸出制限に踏み出しました。自分の言動が何をもたらしたのか、その損害の大きさに気づいていないようです。

高市首相が継承するとした安倍元首相も同じなのですが、安倍元首相は一応形だけの謝罪をしたのですが、高市首相は謝罪もちゃんとしません。首相官邸に引っ越す際に、自分の連れ合いが車いす使用者で、「改修工事が必要だったら自分は入らなかった」という発言をしました。それで、車いす使用の木村英子議員が、「その発言にわたしは傷ついた」という発言をしました。それに対して、高市首相は「もし、傷ついたならば、謝罪しますけれど、・・・・・・」という仮定法で返しました。本人が「傷ついた」と言っているのに、「もし、傷ついたなら・・・・」と「仮定は否定である」というヘーゲルの提言があるようなのですが、「傷ついた」ということに疑う発言をする、こんなひどい応答はありません。NHK党の立花孝志党首が兵庫県知事選の二馬力選挙で、野党議員に誹謗中傷の強迫的攻撃をし、自死者が出たら、「攻撃されて自死するような者は政治家になるな」などという発言をしていました。そのことを想起させます。実際高市首相が首相になって一番初めに共闘をくんだのがNHK党でした。

一時が万事このような「反省・撤回・謝罪もない、仕方も知らない、知ろうとしない政治」なのです。

野党や「市民運動」の同じような構図

自民党の政治だけでなく、それを批判・追及してきた野党や市民運動側にも同じような構図が出ています。辺野古で平和学習の船の転覆事故が起きました。その際の、野党や「市民運動」側の発言の紆余曲折ぶりが批判の対象になっていました。

運動の側には、状況の中では、すなわち激動期には、権力側からの弾圧で命を落とすということもかつてありました。辺野古の運動でも、カヌー隊が海保からカヌーをひっくり返されるとかいう事件のようなことが起きていました。実際に、そのような「実力闘争」的な取り組みに踏み込めないでも、それを支持するひとは、ハラハラしながら当人たちの意志を尊重するというようなこともあったのだと思います。わたしも、運動の中で命をおとしたら本望だというような思いで活動していた時期がありますし、今でも、自分が命を投げ出して社会が変わるのなら、いつでも命を投げ出さうという思いは持ち続けています。

ですが、そもそもそんな状況でもないし、今回の事故で死亡した「不屈」の船長には、それは当て嵌まるとしても、平和学習に参加して亡くなった高校生に、「命をおとすようなことがあっても参加する」という思いがあったと想定されるのでしょうか？ まして、その両親たちが、未成年の娘の行動に共鳴していたかは全く別問題です。そもそも初動から間違えているのです。

運動の基本的理念として、運動をする基本的理念として「かけがえのない一人ひとりの命と生活」、それを脅かされることに抗議する行動でも、このことは原則として貫かねばならないのではないのでしょうか？

事例があります。沖縄・高江のヘリパット建設阻止運動で、宣伝カーの上で機動隊が反対運動参加者に暴行し始めたとき、リーダーの山城さんが、「このまま続けたら死者がでる」として撤収を指示しました。

今回の事故の検証はまだ続いて行くと想いますが、「想定外」のことで事故が起きたという念いもあるのかもしれませんが、そもそも事故が起きたのですから、その「想定が間違えていた」という反省から入ることです。それは、「フクシマ原発事故」の「想定外」という発言が後に、想定されていたのに、無視したというように検証されたことに類比されることでもあります。運動には、そもそも運動を問題・矛盾解決のための活動と規定したところで、その問題を反差別というところからとらえ返したときに、他者の被差別における痛みへの想像的共感が必要になり、その想像性が運動には必要になります。危険の察知というところでの安全性の確保ということが必要なのです。そのことに問題があったから、事故がおきたのではないのでしょうか？

このようなことは、野党の党首選挙のときにも出ていました。新しい党首が決まったとき、リベラルの記者から、新しい出発をするのに、ノーサイド的なこととして、落選者にも発言させたらどうかという意見が出たのに、司会者が無視し、再選された党首も、取り入れることを拒否しました。それで、落選者は途中退席しました。この後、党首は対応のまずさを記者会見を開き謝罪したのですが、その時、別の記者から、落選者に会って直接

謝罪しないのかを問われて、記者会見の場で公的に謝罪したのだから、直接会っての謝罪はしないと発言していました。これは、高市「台湾有事発言」のときと、せっかく「撤回」の機会をあたえられたのに拒否するという同じ構造なのです。「がんこ」になどと言う発言を以前からしていたのですが、左派やリベラルに「守旧派」のスコーガンのようなことは禁句です。

過去の歴史の総括(政権側)

そもそも反省ということから、発言の撤回、謝罪という形に進むのですが、過去の高市発言をとらえると、村山首相の過去の戦争と植民地支配の歴史の反省・謝罪に「勝手に謝罪してもらっては困る」と突っ込んでいたひとで、歴史修正主義者で、自民党の極右化のその先頭を牽引し走っていたひとです。そんなひとが、陰謀術策を駆使して自民党総裁になり、首相になり、選挙制度のマジックと同じ陰謀術策で圧倒的議席を獲得したのです。

そもそも過去の戦争の反省からできた「平和憲法」を改定しようとしていること自体が過去の反省と謝罪のリセットなのです。そもそも村山談話以降、何度も談話とか共同声明のようなことで、「謝罪と反省」が繰り返されてきていて、自民党の中で、「いつまで謝罪すればいいんだ」という発言が出ているようです。実際、自民党の中でテレビに出て極右的発言をしている新藤議員が最初は「自民党の中には「いつまで謝罪すればいいんだ」という意見がある」と自分の考えかどうかをあいまいにしていたのに、とうとう自分の意見として出していました。こういう発言自体が過去の謝罪のリセットになります。政権党は外交関係上、過去の「反省と謝罪」を踏襲するなら、それをリセットするような発言をするものは、即刻除名処分を下すことです。そもそも、麻生元副総理が、そのようリセット発言を繰り返しています。そして、何度かの発言の撤回をしています。そもそも反省がないから繰り返すのです。そして、撤回をしています、謝罪はあいまいにしています。だいたい、なぜ、処分されないのか判らないのです。そもそも軍国主義のシンボリック的存在である、靖国神社へのしかも集団参拝を与党議員がしていて、何の処分もされないという事態がおかしいのです。「反省・撤回・謝罪」という3点セットで、とりわけちゃんと反省をしないことをそのまま放置している政治が、そして野党自身も「反省・撤回・謝罪」ということを位置づけが成されていないこと自体にも問題があるのです。

過去の歴史の総括(政権批判側)

前項の最後に書きましたが、そもそも野党も「反省・撤回・謝罪」といことが判っていないという事態にでくわせます。そもそも右派ポピュリズム政党は、そのポピュリズム性ということでは、票を多くとるために、そしてそこで権力をにぎるとか、政権に入ることが目的にして、民衆の意識がどこにあるかをとらえて、その意識に乗った政策を取り入れるということに奔走します。右派という規定がつくところでは、何らかの差別排外主義を掲げて、何かスケプゴートのものを設定して、それを叩くことによって、票をとり勢力を伸ばそうとします。例えば、維新が大阪維新の会として登場して、脱原発、地方分権、構造改革が旗印でした。脱原発は早速放棄して今は推進派です。地方分権は、大阪都構想という大阪府が大阪市を吸い上げるというところで逆行しています。構造改革は職員叩きをして府民・市民の支持を得るというまさに右派ポピュリズム的核心のようなことで、構造改革は福祉の切り捨てに入っています。そして、そもそも安倍元首相に秋波をおくって

いて、政権批判はしつつ、政権右派別働隊に動いていたところから政権に入りこみました。新しく登場した参政党は、エコロジーとか党員で政策を作るというところで「対話」の姿勢を出して、ポピュリズム性を出していますが、「日本人ファースト」という差別排外主義で、神谷党首のエコロジーとか「対話」はどうでもいいことのようにしかみえません。そのような政策は、そのうちに、消えてなくなるでしょう。

さて、野党とは言えない勢力は措いて、問題は、左派やリベラルと言われている勢力です。「左派ポピュリズム」を言うひとがいるのですが、ポピュリズムには、誤魔化す・騙す・論理的一貫性がない、という規定が出てくるのです。少なくとも、そのような政党には、「左派」という規定は当て嵌まらず、「ポピュリズム」規定される党は、「左派性を棄てた党」ということになります。そもそも、みずからを「右でも左でもない」と規定していることもあります。

さて、そもそも自分たちの政党は自立性をもっており、外国の政党とは違うとかいうことで、国際的な左派的な運動の総括しないことで、自分たちの政策や綱領をとらえ返しをしない政党の問題があります。今日、まだまだら模様ですが、反差別ということへの取り組みから、自らの当事者性で反差別の問題意識がかなり広まり深まってきています。そういうところで、左派的なところの綱領とか方針ということへの反発・批判がでています。そこで、そのことときちんと対話し、そして綱領・方針をちゃんと見直すことなのですが、そこまで踏み込まないで、表面的に言葉を変えるとか、その言葉は使わないようにする、とかいう対応にとどまっていることが見受けられます。例えば、「プロレタリア独裁」の「独裁」を「執権」に代えるとか、そもそもそういう詞自体も使わなくするとか、レーニンの組織論が民主主義的ではないとか、民主主義からする「地方分権」の動きに合わなくなっているとかいう批判の中で、「マルクス・レーニン主義」を唱えていたのに、「科学的社会主義」ということに置き換えるとか、そもそも何が問題になっているのかを押さえないで、すなわち、反差別というところでの批判が起きていることを押さえないで、言葉だけの転換にしているのです。反差別運動では当事者主体という基本的概念が拡がっているのです。ところが、「マルクス・レーニン主義」は「前衛党」を自称しているので、個別被差別事項では、そもそも「前衛」とかいう概念自体が問題なのですが、あえて、そのまま使うとするならば、「前衛」は被差別当事者なのです。そこで、「前衛」意識自体からとらえ返すことなのに、そこまで至らず、結局、差別の問題では、自民党のリベラル的なひとたちよりひどい、反差別では差別する側に立っているという批判から、まだ抜け出せていないのです。これは、この巻頭言のテーマで、そもそも「反省」・総括からきちんと始めるということとリンクすることです。

さて、もう一つ別の党の話、前々項で書いていたことの展開です。発言の場を与えないということで謝罪したのは、対応がまずかったということでの修正的・表面を繕う発言で、発言の場を与えない・排除して傷つけられたのは他の候補者で、謝罪はすんでいないのです。そもそも、選挙の際に、「頑固に憲法9条を守ります」とかいうスローガンを出して、守旧派的なところに落ち込み、しかも対話の姿勢を消失しているのです。そもそも、「頑固」の後に続く名詞を想像してみるといいのです。それは「オヤジ」です。今、「夫婦別姓」とか「同性婚」などに反対しているひとたちが、まさに家父長制的「オヤジ」のたぐいなの

です。

これは「論理一貫性を貫く」、「右派ポピュリズム・ファシズムに対抗する」に変えることです。守旧派とは区別するために「憲法を守れ」ではなく「憲法を活かす」とか、「憲法9条を世界の憲章に」とかいう表現にすることです。そもそも何をしているのか、何をしようとしているのかが曖昧になってきています。議席を確保するというジリ貧状態になって、「議席を守る」という、まさに「守る」という「守旧派」に陥っているのです。左派的な・リベラル的な政党は、本来は社会を変えるというメッセージで、勢力を伸ばす努力をしていくことなのに、「守る」ということを突き出していくと、どんどんジリ貧になっていくしかないという今の状況なのです。

まとめ・きちんとした「反省」・総括から始めること

そもそも、国会から左派的な勢力が消えているのですが、民衆は今の状況に不満を抱き、それが大きくなっているのです。だから、きちんとした「社会を変える」という突き出しをすべきことです。それには、そもそも「変える」方向性を示すためにも、過去の自分たちの運動の、それにとどまらず、自国のみならず世界的な「社会変革運動」のきちんと「反省」・総括が今、必要になっています。

わたしはそのことを「社会変革への途」ということで書きかけていました。勉強不足を感じ、中断していろいろ学習し論考を深めようとしていたのですが、まだまだ勉強は足りないのですが、もはや時間が残されているとは思えないので、執筆活動に入りたいと思っています。

(み)

(「反差別原論」への断章) (123) としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 195 号」アップ(26/9/18)
- ◆「反差別資料室C」の「文献室」、新しい本の購入や読書に合わせて、今年3月初めに約1年ぶりにリアップしました。
- ◆「反差別資料室A」の「V その他」に「「吃音」関係文書要保管一覧」を集めました。わたしの当事者性の「吃音」関係で書いた文書の案内になっています。「通信」の174号で書いたものの加筆・修正版です。これからここで、更に加筆・修正していきます。
[6a934e_6e8bf8b12ce744a3bb220f5b591d38d3.pdf](http://www.taica.info/6a934e_6e8bf8b12ce744a3bb220f5b591d38d3.pdf)
- ◆メインホームページ「反障害－反差別研究会のHP」のIV. F[廣松ノート]
<http://www.taica.info/hiromatunote.html>に「第二次学習ノート」
「マルクス・エンゲルスの革命論の栞」<http://www.taica.info/merm.pdf>
『現代革命論の模索』<http://www.taica.info/grm.pdf>
『新左翼運動の射程』<http://www.taica.info/nls.pdf>
『東欧激変と社会主義』<http://www.taica.info/ees.pdf> をアップしています。

読書メモ

今回は、ながーく積ん読していた。ファシズム論の基本文献とされるフランクルの『夜と霧』と、「第二次廣松ノート」の本格的始動として、「マルクス主義三部作」の最初、『マルクス主義の成立過程』です。長くなったので2回に分けたので、その最初です。

たわしの読書メモ・・・ブログ 737

・ヴィクトール・E・フランクル／池田香代子訳『夜と霧 新版』みすず書房 2002

この本は、ファシズム論と心理学の基本文献になっているようです。わたしは心理学に関しては、色々他者と対話する時には相手が何を考えているかをとらえるために当然心理的なところをとらえて話すために、「心理を読む」ことをするのですが、むしろ、相手の置かれている状況をとらえるというところの方を優先的にとらえるので、相手の心理的な動きという分析など殆ど意味をなさないということがあります。そういう心理学忌避的なことがわたしの中にあるので、長く積ん読してしまっていた本です。

著者はユダヤ人の精神科医でナチスのホロコーストの強制収容所というところでの、死が常態的に迫って来る中での、自分の心理を含んだ、ひとびとの心理を描いています。この本を出し得たというところで、紙一重で死を逃れたのですが、多くの、何かをほとんど感じることもなく亡くなった仲間や、自分の両親、連れ合いがいます。そして、一緒に生き延びようとしたひとたちが突然生きる意欲や、状況を消失して行く様も描いていて、絶望渦巻く中で生の意欲、また絶望の心理に陥りつつも、それでも妙な明るさとかをもったり、人の心理の複雑な揺れ動きも描いています。

ファシズムがひとに何をもたらしたかを知っておくためにも、やはり、ファシズム論の基本文献の一つだということを再確認した次第です。

心理的なことは、ひとが各々何を感じるかということなので、今回は切り抜きメモはパスします。自分で、この本を読んで、何かを感じとってくださいー

たわしの読書メモ・・・ブログ 738 [廣松ノートⅡ— (5)]

・廣松渉『増補マルクス主義の成立過程』至誠堂 1984(上)

廣松さんの「マルクス主義」の「三部作」の一冊目です。この本は増補版で、初版は1968年に出版された最初の単著とのこと(『著作集』の解説・解題)、実は成稿は『エンゲルス論』が先になっていたとのこと、『マルクス主義の地平』『マルクス主義の理路』と続くのですが、後の二冊は、廣松理論の成立過程とも言える、廣松さんの理論生成過程ともいえるべき論攷で、この本は、マルクスが青年ヘーゲル派との論争過程から、マルクスがエンゲルスと共に、青年ヘーゲル派からその論争の只中から自らの思想を成立させていった過程を描いている書で、そういう意味では、『エンゲルス論』『青年マルクス論』『マルクスの思想圏』との親和性の方が強いのかもしれません。こちらの学習は、第三次学習で(それまでわたしが生きていれば、頭が動いていればの話ですが)展開する予定です。只、廣松理論がマルクスの文献学的研究から、理論形成していったということを押さえるならば、やはり三部作の最初に取り上げることだと、わたしはここに位置づけています。

ところで、この著の初版の中でも『ドイツ・イデオロギー』の編輯について」があり、更に増補版で、『ド・イデ』に関する論攷を三つ入れています。廣松さんは、『ド・イデ』の編集というところで名を馳せたひとで、しかもエンゲルス主導説を展開したのです。この論文集でも「初期エンゲルスの思想形成」他があり、エンゲルスが草稿を書き、それにマルスがコメントして、更にエンゲルスがそれにコメントと自己校正もしていくという形で、『ド・イデ』の基底稿たる「I、フョイエルバッハ」の草稿が成立していったこと、初期において、エンゲルスが経済学への誘い、共産主義論への誘い、運動的な処への誘い、また、分業論の展開（但し、これは問題含みのようです）など、エンゲルス先導説が廣松初期マルクス・エンゲルス関係のとらえ返しの理論の核心になっています。その他、ヘスの影響ということ、とりわけ協働論や、シュタイナーの国家＝幻想共同体論の先駆的なこと、まさにマルクス理論の青年ヘーゲル派内の論争から出てきている理論、これをどう現在の的にとらえるかの問題等、青年ヘーゲル派の読み込みに、わたしを誘うのですが、とても、かなえそうにありません。

さて、廣松さんは、運動と理論的なことを同時に展開しつつ、理論の基礎的なところから押さえ直す作業の必要性を感じ、マルクスの文献学的研究から、自らの理論をアカデミックに展開していったのです。そして、廣松物象化論、廣松共同主観性論、廣松四肢構造論、廣松役割論など、独自の理論を打ち立てたのです。日本語という世界的な議論としてはマイナーな言語で、マルクス研究の世界的波及ということでは壁があるのですが、それでも例えばアジアにおいては中国語訳が出てくるなど、世界的に評価されるひとなのです。『ド・イデ』の訳について、廣松訳批判が出ています。確かに、批判が当たることもあり、『ド・イデ』の岩波文庫版で、廣松さんの没後の出版になっていますから、補訳者の小林昌人さんが、その批判を取り込んで、補正していたりします。ですが、そもそも、訓詁の学ではないところでの、マルクス／エンゲルスの理論をどうとらえ、現在の的にどう活かしていくのかというところで、廣松訳の限界は歴史的制約性の類いのことです。

そんなことより、わたしはそもそも基礎学習が成ってなく、もはやそこから始め得る歳ではないので、あくまで、運動のための理論として、廣松理論を追っかけています。ですから、細かいマルクスの文献学的研究には踏み込まず、大雑把につかんだところで、ここでは、疎外論から物象化論へと転回する廣松理論を押さえるところで、この読書メモも、大枠を押さえるところでの簡単なメモ取りになってしまうことを、「内心忸怩たる思いを懷いて」います。なお、余りにも膨大になったので、(上)(下) 2回に分けました。

まずは、目次から。

目 次

選書版への序文

旧版への序文

初期マルクス像の批判的再構成

補遺 ヴィルヘルム・シュルツの歴史・社会観

マルクス主義と自己疎外論

初期エンゲルスの思想形成

補遺 いわゆる“口実筆記説”に寄せて

【附】 エンゲルスの再評価のために
『ドイツ・イデオロギー』の編輯について
——東ドイツ新版の出現を機に
『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点
【附】Ⅰ『ドイツ・イデオロギー』ソ連新版について
【附】Ⅱ『ドイツ・イデオロギー』新版が投じた東ドイツ哲学界の新しい波紋
『ドイツ・イデオロギー』の文献学的諸問題
——新MEGA(試行)版に寄せて——
『ドイツ・イデオロギー』研究の現段階
——手稿復元(河出書房)版を編んで——
【附】『ドイツ・イデオロギー』手稿復元版を編んで
弁証法の唯物論的顛倒はいかにして可能であったか
選書版へのあとがき

大枠は冒頭に書いたもので、いきなり、各論稿ごとの切り抜きメモに入ります。

初期マルクス像の批判的再構成

「・・・・・・『経哲手稿』と『フォイエルバッハに関するテーゼ』を経て『ドイツ・イデオロギー』の間によこたわる深淵なるギャップであって、移行過程の内的必然性、そこにおける連続性と不連続性が画定されておらず、従ってマルクスの思想像を有機的全体として再構成することに成功していないことの謂いである。／従来の研究がこのギャップを埋めることのできなかつた最大の原因は、当時のマルクスが“大先輩”モーゼス・ヘス——傍系のヘーゲル左派で『ライン新聞』の大立物——の圧倒的な影響下にあったことを、無視ないしは過小に評価してきたことにある。・・・・・・」 2P

「・・・・・・このヘーゲル左派の展開過程は、決してフォイエルバッハの中間遁駅とする単線的なものではない。そこにはヘーゲル左派自体の内部における三つの流れとその綜合が介在する。第一のシュトラウス、バウエル、フォイエルバッハと流れる宗教批判の系列(これはさらに中期バウエルとその一派によって継続される)、第二にチェスコウスキー、ヘスへ流れるヘーゲル歴史哲学批判の系譜、第三にルーゲを経てマルクスへ連なるヘーゲル法哲学批判の系譜である。図式的に言えば、マルクス主義は——但し、経済学の体系を描きうる限りで——これら三つの流れを綜合・止揚することによって成立しえたのであった。」 6P

- 一 ヘーゲル左派の三極化と『ライン新聞』の時代
- 二 ヘーゲル法哲学との対決と『独仏年誌』の時代
- 三 歴史哲学批判の系譜との交流と『経哲手稿』

「・・・・・・少なくとも政治・社会問題に関する発想と視角は、ヘーゲル法哲学の延長線上にあった。パリにおける経済学研究の開始も——エンゲルスの触発とみる通説は必ずしも当ておらず——ヘーゲル法哲学の或る所説に触発されたものと考えられる。ところが『経哲手稿』に至ると、そこにはヘーゲル歴史哲学批判の系譜との“交流”もみられ、ヘーゲル法哲学の大枠を遙かに超出しはじめる。／マルクスのこの飛躍は、モーゼス・ヘ

スの影響をぬきにしては考えられない。嘗て『ライン新聞』の時代にはマルクスはヘスを敬遠したのであったが、彼自身の思想形成の進捗につれて、今やヘスに倣いうる条件が成立していた。①マルクスは既に四四年の初頭までに、ヘーゲルにおける主語と述語との顛倒というフォイエルバッハの指摘に共鳴して、それまでのバウエルの従って「自己意識」と読みかえて糊塗してきた「絶対精神」を人間に置換すべきことを感ずるに至っていた。②但し、この人間はアトムの諸個人ではなく、「共同体存在」ともいうべき“ドイツ的”人間であり——この「人間」の類落(たいらく)形態たる市民的アトム化を止揚して「人間」を即自対自的に実現すること、これをマルクスは「人間的解放」と呼んだのであって——、それはフォイエルバッハの「類的存在」に近い。だがマルクスは、この類的存在の本質的性格を「愛」に局限することはなかったし、折しも開始していた古典経済学の研究と相俟ち、社会的労働の主体としての人間把握と二重写しにするメンタリティーにあった。／しかるに、フォイエルバッハの類的存在をまさしくこのように改釈し、この主体概念に拠って自己疎外と回復の過程としての人間史を描き出し、社会・経済・革命の問題を論じてたのが、当時パリに在って『独仏年誌』に協力していたモーゼス・ヘスにほかならなかった。」28-9P・・・廣松さんは物象化論を押さえたところで、単なる「顛倒」ではなく、ヘーゲルの実体主義的疎外概念自体を批判するに至ります。

「モーゼス・ヘスは——ルーゲ・マルクスが法哲学のシェーマを継承したのに対して——ヘーゲル歴史哲学を換骨して共産主義を立てたということができる。」30P

「これを批判的に継承して、自由実現の行為を現実の人間の業となし、かつは自由の現実態をゲルマン国家に代えてフーリエの社会主義的未来像に托したチェスコウスキーを承けて、ヘスは更に一步を推し進めたのであった。」30P

「「行為の哲学」は、ヘスの場合、固有の主体概念に俟つ。彼はデカルト以来のコギトーに代えて、人間を自己活動 Selbsttat, Selbstbetätigung の主体として把え、しかもこの人間を本源的に社会的な存在として把える。ここにおいて人間の本質は協働 Zusammenwirken があるとされる。「この協働こそが個人の現実的本質である。……思惟やや行動も専ら協働が生ずる。……《精神》という神秘的な名で呼ばれているところのものも……この協働にほかならない。協働がはじめて生産力を現実化する、云々」(Ib.330f.Vgl.S.210.228.S.275.S.287)。ヘスは、人間を単なる類的存在、単なる共同体をなす存在 Gemeinwesen ではなく、協働をなす存在、協働存在として規定し、社会的な仕方労働する存在というこの主体概念のもとで、彼のいう「自由」の概念、その真の実現としての共産主義、これを実現するための現実的・歴史的諸条件、遡っては社会経済のメカニズム、等々を説くのである。」31-2P・・・ヘスからの「協働」「共産主義」概念

「マルクスはフォイエルバッハをヘス式に改釈するとはいえ、『経哲手稿』ではまだ、いわばフォイエルバッハとヘスとの中間の立場にあったということができる。それは究極的にいえば、主体概念の設定の仕方に懸っている。……」36P

四 エンゲルスとの再会と新しい世界観への途

「……………しかるに今や『経哲手稿』以来の主体概念そのものが、従ってまた疎外の論理そのものが、バウエル派の思弁的構成の秘密の暴露に伴って、もはや problematisch になったのである。この自己批判的省察の第一歩が、早くも『フォイエルバッハに関する

テーゼ』で踏み出される。」44-5P

『フョイエルバッハに関するテーゼ』は四五年の春、ブリュッセル——マルクスは『フォルヴェルツ』紙に関係した廉で前年の末パリを追われてここに移住していた——で書かれたものと推定される。この有名な覚書きは、エンゲルスの影響もさることながら、ヘスの影響をぬきにしては考えられない。一言で性格づけるならば、この十一項からなるテーゼは、マルクスが“フョイエルバッハとヘスとのいわば中間の立場”から、ほぼ完全にヘスの立場に移行したことを告げる文書である。」45P

「顧れば、ヘーゲル左派の三極的分解の兆しが生じた頃、バウエル派の穏健な一員として出発したマルクスは、むしろ右寄りの批判を契機としてルーゲの陣営に移り、ヘーゲル哲学との対決を通じて「市民社会から国家へ」のシェーマを換骨し、真の人間共同体としての共産主義への志向を固めたのであった。次いで、この共同社会の否定の否定としての実現を、自己疎外と回復の論理によって弁証法的に展開する姿勢をみせ、歴史哲学的なパースペクティヴを確保しつつ、いわゆる三つの源泉の総合的統一の途に就くことができた。この過程を通じて、彼はバウエル派とルーゲ派とをともに超えることができたとはいえ、やがてフョイエルバッハ・ヘスの主体概念——従ってまたこの主体概念に俟つ限りでの自己疎外の論理——のもつ難点に気付き、一旦ヘスの立場へ純化・徹底することになった。」

48-9P

「四五年春、“亡命地”ブリュッセルで相会したヘス、マルクス、エンゲルスは、翌る四六年かけて、『ドイツ・イデオロギー』を共同執筆することになった。この共同作業の過程、それが当時二十七歳のマルクスにとって、ヘーゲル左派の三極を端的に総合・止揚しつつ、ヘスの思想的立場と水準から脱却する「自己了解」の過程となった。」49P

補遺 ヴィルヘルム・シュルツの歴史・社会観

「ところがコルニューによれば、シュルツは同書の初めの方で、唯物史観に極めて近い思想を打出していた様子である。……」50P

マルクス主義と自己疎外論

(一)

「……いやしくも「マルクス主義と自己疎外論」を論じようとする限り、しかも「自己疎外」に原理的な意義をもたせようとする限り、少なくとも差当っては、ヘーゲルの乃至ヘーゲル学派的な語義において、すなわち、マルクスが踏襲している語義において、それを問題にすべきであろう。／元来、自己疎外ということは、特別な主体概念と不可分である。周知の通り、ヘーゲルにおいては、彼のいわゆる「精神」がかかる主体概念であった。ヘーゲル左派においては、それが改竄乃至転置されて、シュトラウスの「人類」(Menschheit＝人間性)、バウエル兄弟の「自己意識」(Selbstbewußtsein)、そしてフョイエルバッハの「人間なるもの」(Der Mensch)、更には「類的存在」(Gattungswesen)となった。かかる主体が、自己を自己に対して疎ましい他在として対立せしめ(sich selbst entremden)、自己自身を外在化せしめ(sich ent-äußern)、対象として現前せしめる(vergegenständlichen)。かくの如き主体のありかた——それを傍観している哲学者にとっては(für uns)主体が自己性を失っているわけではないにしても、当の主体としては自らのその「他在」(Anderssender Äußere)となっており、そのうえ、この「他者」によって規制

されているようなありかた——これが「自己疎外」「外化」「対象化」である。それ故、自己自身を疎外する主体をぬきにしては、「自己疎外」ということは意味をなさないのである。／ところで、このような自己疎外とそれからの回復——ヘーゲルの用語法でいえば「獲得」(Aneignung)の歩み行きが、彼の哲学の、わけでも『精神現象学』の基本シェーマになっていたこと、これは周知の通りである。……」 56-7P

(二)

「……ヘーゲル主義を換骨奪胎せる自己疎外論を媒辞とするとによって、「ドイツ古典哲学」を止揚しつつ、古典派経済学と先行社会主義とを相互媒介的に定礎し、揚棄する途が拓けたのである。まさしく初期マルクスの自己疎外論は、それをまっではじめて「三つの源泉」が媒介的統一にもたらされ、よってもってマルクス主義の生誕をかのうならしめた当のものである。」 62P

(三)

「ところが、マルクスはその後二年を待たずして、自己疎外という概念と訣別するに至った。彼は人間の自己疎外という——『経済学と哲学とに関する手稿』当時における如き——発想そのものを超克するに至ったのである。」 62P

(四)

「結論から先に云えば、自己疎外論超克の必然性は、なによりもかの主体概念に根ざすものである。上述の通り、自己疎外論は或る特有な主体概念をまっではじめて存立しうるものであるが、マルクス・エンゲルスは、自己疎外論がよってもって成立しうる如き主体概念一般を、端的に克服していた。このことによって、自己疎外論はもはや維持されがたいものとなったのである。」 66P

「……「人間の本質は、個々の個人に<共通に>内在する抽象的一般者(Abstraktum)ではない、人間の本質(人間という存在者)は、社会的関係の総体(Ensemble)である」(テーゼ六前半)。マルクスは「類的存在」として人間というフョイエルバッハ的主体概念からの脱却と相即的に(テーゼ六後半)かくの如き新たな主体概念を採るに到ったのである。」

67P・・・？主体概念＝実体主義自体の止揚

「……「分業に下属」せる個人、「社会的諸関係の総体」としての人間存在は、そのような自己疎外過程の主体一般とみなされることはできない。……或いは論理的にはむしろ、資本や賃労働の定在をまっではじめて、プロレタリアという規定をもった主体となるのである。一般化していえば、人間の本質を社会的諸関係として把える以上、かかる人間は、第一次的には歴史の能産的主体ではなくして所産的主体である。……」

68-9P・・・分業の止揚の必要性・必然性

「ヘーゲルにおいてそうであったように、歴史性と論理性とは本源的に相即しなければならない。しかるに上向法においては、それは「ça dépend (それは場合による)である」(経済学批判序説)。マルクスの立場からすれば、メトドロギッシュ(methodo 方法論上)にも『経済学と哲学とに関する手稿』におけるが如き自己疎外論は採ることが出来ないのである。」

70-1P

(五)

「……アトムとして、自由な存在として「契約的」社会関係に入り込むブルジョ

ア・イデオロギーの描く個人とは反対に、マルクスにあっては、人間はその本質において「社会的諸関係の総体」として把握されているのである。ここには、人間観における決定的な転換が存する。この点を看過し、ひそかにブルジョア的人間観を前提しているのみか、更には、マルクス・エンゲルスによって超克された「人間解放論」、ひいては同じく止揚されたヒューマニズムに通ずる限りにおいて、よしんば常識的な自己疎外論であっても肯んじ難いのである。」 73P

(六)

「しかし、後期マルクスの立場を扮するならば、恐らく次のように云うことができよう。実存主義における主体はまさしく「純粹の・真実の・個人」乃至は、「聖マックス」の謂う「自我＝唯一者」にほかならず、デカルト的自我の最期の変形である。しかるに、デカルト的自我は前項にいう「常識的人間観」の哲学的表現である。この意味において、実存主義的人間把握は現代云々という掛声にも拘らず、未だに近世的である。しかるにマルクス主義は、デカルト的学統の近世的ブルジョア的人間観を超克したことによって成り立ったものである。こう考えてくると、いわゆる旧来のマル存主義は、マルクス主義からの後退でなくして何であろうか。それはマルクス主義を「継承的に発展」するどころか、戯画化するものである。」 76P

「・・・・・・そもそも論者達のいう聊か珍奇なザインとゾレンとの分裂が、なぜ生ずるのかを考えてみるがよい。問題を単なる論理的包摂関係に還元してしまわない限り、それは結局のところ、階級社会においては望むべくもない超階級的普遍妥当性を求めることに因る。「分業に下屬」せる人間の立場に立つ限り、それぞれの埒内においては、「階級的意識(知識)は本源的にソクラテス的知である」以上、「ザインとゾレンのとの分裂」はそもそも存立しない。・・・・・・」 77P

初期エンゲルスの思想形成

【附】 エンゲルスの再評価のために

廣松さんのカテゴリー的標題の頁にある解題的文の指示に従って「【附】 エンゲルスの再評価のために」から入ります。

「第一に再評価すべきことは、マルクスの思想形成期にエンゲルスの及ぼした積極的な影響である。従来の研究では「マルクスに経済学研究の決意を固めさせた」という一点だけが強調されているが、私の考えではこの点についてはむしろ割引く必要がある。今日、特に評価すべきことは、モーゼス・ヘスおよびフォイエルバッハの影響からマルクスを解き放った点である。／・・・・・・／より重視さるべきエンゲルスの影響は、ヘスとの関係においてである。近年に至るまで一般には留意されていないが、四四年から四五年春にかけての時点では、マルクスは大先輩モーゼス・ヘスの圧倒的影響下にあった。・・・・・・／この状態からマルクスを脱却させ、いわゆるマルクス主義の方向に促したものの、それは同じくヘスの「門下」として出発しながら、いちはやくヘスを乗り越えていたエンゲルスとの書簡のやりとりと本式の協働作業であった。マルクス主義の成立にとって決定的な意義をもつ契機として、この点をあらためて評価すべきであろう。」 120-1P

「第二に、右にいう協働作業にも関わる点であるが、共産主義理論と唯物史観とに関して少なくとも当初のあいだ、マルクスを先導した功績を評価しなければならない。四五年の

後半から翌年にかけてブリュッセルで共同執筆された『ドイツ・イデオロギー』は、俗に「唯物史観誕生の書」と呼ばれている通り、マルクス主義の成立にとって劃期的な論稿であるが、その白眉たる「第一篇、フォイエルバッハ、唯物論的な観方と観念論的な観方との対立」の原稿は、エンゲルスの書き下ろしたものにマルクスが加筆修正を施したものであって、手稿を文献学的に検討し兩人の文章を比較検討した結果、この遺稿で確立された新思想は、エンゲルスの方が主導・先導したという認定を生ずるに至った。」122P

「第三に挙げなければならないことは、マルクスを実践運動に引き入れ、マルクス主義を「共産主義者同盟」公認の理論として定着させた功績である。……／……／一方のマルクスは、伝記家たちが切磋琢磨(やくわん)するほど「政治家としては……」であったことを思うにつけ、これまで高く評価されてきた「祖述家・伝導家」としての役割という以上に、「将軍」の異名をとった辣腕のオルガナイザー、エンゲルスの納めた“戦果”をもう一度見直す必要がある。」122・3P

「第四に、近来悪罵の的になっている“自然弁証法”の再検討が問題になる。遺稿『自然弁証法』は前後二十年にわたって書きつけられたものであり、その間に幾度か構想の変更を蒙った未定稿であるが、不幸にも、人々は従来“ロシア・マルクス主義”の枠にあてはめてこの遺稿を抜き読みしてきた。現行の諸版では——なるほど素材そのものを初めて公表した一九二五版に較べて整理されてはいるが——エンゲルスが自ら自覚した筈の凄惨な破綻とそれにもとづく著述計画の変更が、編輯の不手際(?)のために覆いかくされている。エンゲルスの自然弁証法を論ずるためには、当該遺稿の整理と再考証、ひいては編輯の手直しから始めねばならない。その暁には意想外の光が投ぜられる筈である。」123P・・・これに関しては、わたし自身の反差別論の立場から、そして、新メガにおける研究から、エンゲルスが晩期マルクスの思想(それは「マルクス主義者は差別の問題をとらえ返せていない」という批判において、それを乗り越えるような兆しがでていたこと)についていっていないという批判が出てくるに及び、そしてマルクス・レーニン主義ということが、ヘーゲルに先祖返りしたエンゲルスの思想において、実はエンゲルス・レーニン主義とも言えるような内容になっていて、そのあたりのとらえ返しが必要になっているともとらえています。

ここから、附録的文から主文に戻ります。なお、節的な漢数字の後の斜文字は、わたしが学習ノートのつけた標題です。

「結論の一端を先取りしていえば、われわれは通説とは反対に「唯物史観およびそれと相即する共産主義理論の確立に際して第一ヴァイオリンをひいた」のは、合奏の初期に関する限り、むしろエンゲルスであることを確認せざるをえない。」81P

(一)エンゲルスの共産主義者としての定立

「エンゲルスは、一八四三年、彼が二十二歳の頃には、はっきりと共産主義に賛成の立場をとっており、一廉の共産主義者として発言している。一方、二歳年長のマルクスは、四四年の或る次期、見方によっては四五年にいたるまで、共産主義に対して懐疑的な態度をとっており、エンゲルスの早熟ぶりには瞠目すべきものがある。……」82P

「……それでは一体どういう経緯からこのような立場と結論に到ったのであろう

か？　ヘーゲル左派としての自己展開に立入る前に、ここでは取敢えず外面的な事情と他の共産主義潮流との関係に触れておこう。／第一に考えられるのは、モーゼス・ヘスの影響である。……／第二に考えられる外的な事情は、当時上げ潮に乗っていたチャーチスト達との接触である。……／第三の外的要因は、当時“階級闘争のショーウィンドー”であった英国に在住し、穀物法をめぐる赤裸々な争いを目撃したことである。……」83P

(二)『国民経済学批判大綱』と『カーライル論』

『『独仏年誌』に掲載された『国民経済学批判大綱』は、マルクスによって「天才的な小論」と評価され、「マルクスに経済学研究の決意を固めさせた」(レーニン)ばかりではなく、両人を結びつける機縁となった論文である。この論文は単なる学としてのエコノミーに対する批判ではなく、同時にナチオナルエコノミーそのものに対する批判であって、おのずから彼の共産主義理論の背景を窺わせるものとなっている。」86-7P

「ここにおいてエンゲルスは「類意識のない細分されたアトムとしてではなく、人間として意識的に生産せよ、そうすればこれらすべての人為的な維持しがたい対立を克服」できる(Ebenda (同じ箇所))ことを教え、今やそのような共同的、意識的な生産・配分の社会、一言でいえば「自由の王国」を実現しうべき時点に近づいていることを指摘する。『国民経済学批判大綱』では、このように、必然の王国から自由の王国へ、その可能性と必然性という視角から共産主義に基礎づけが与えられている。」89P

「このような水準に達しておりながらも、エンゲルスはまだヘーゲル左派の残滓を払拭していたわけではなかった。そしてそのことがエンゲルス特有の仕方で経済学と共産主義とを結合しえた背景にもなっている。その間の事情は『独仏年誌』のもう一つの論文『カーライル論』から窺うことができる。／「カーライルの立場は——とエンゲルスはいう——ドイツ的汎神論の考え方である」……このように「内的・宗教的側面」の土俵においてはエンゲルスはまだバウエルやフォイエルバッハの立場に立っている。」89-90P

「エンゲルスは……人間が類としての本質を喪失している状態という意味で非人間的な状態と観ずる。彼が『国民経済学批判大綱』で指摘したとき、「孤立したアトムの諸個人」が「無政府的」に競合しあっている状態こそが、まさしく“類的存在”たる人間が「類を喪失」した状態にほかならない。ここにおいて「本質」を回復することこそがゾレンとして設定される。……そのような社会体制として共産主義社会が存立する。かくして、一言でいえば、ヘーゲル左派の志向した人間の本質の回復は、共産主義的“人倫的生活共同体”という形においてのみ実現される。このような順路において、エンゲルスは共産主義を、人間の本質の“宗教的疎外”からの回復を追求してきたヘーゲル左派哲学の必然的帰結だと云うのであろう。」90-1P・・・「本質」という概念自体の止揚の必要

(三)マルクスとの接触

「……エンゲルスはヘーゲル的な「疎外の論理」そのものを卸ける。それというのも、エンゲルスはフォイエルバッハの「人間」をシュティルナーの方向に、つまり類的存在を自立的な主体にするのとは逆方向に、具体的・経験的な諸個人にほぐしていく方向にいちはやく向かっていったからである。／そもそも前節でみた通り、社会の状態をかなり適確に経済学的・具体的にとらえ、共有制をもとにして社会を再組織すべきことを知った

エンゲルスにとっては、人間本質の自己疎外と回復という哲学的・抽象的なシェーマに押し込めて立論することは、余り必要でなくなっており、社会学的な説明こそが、課題となっていたのである。」 92-3P

「ともあれ「疎外の論理」に拠る「思弁的構成の秘密」を自覚的に批判したこと、これがヘーゲル左派を「ドイツ・イデオロギー」として卻け、ヘーゲル左派を脱却するための動索となった。・・・・・・」 94P

「・・・・・・マルクスが仕上げ中であった『神聖家族』(刊行は翌年二月)では、バウエルの「自己意識」に対してフョイエルバッハの「人間」が対置されており、また「唯心論と唯物論の対立がフョイエルバッハによって克服された」(MEGA 1. Abt. 3 Bd. S. 266)と主張されている。しかるにエンゲルスは、いち早くフョイエルバッハ批判と相即的に、唯物論の立場を標榜するに至ったのである。／しかも、それは、先の引用文から知られる通り、ヘーゲル学派的な思弁的構成とは逆に、個別から普遍を導出する唯名論的・経験論的立場と吻合する。・・・・・・」 94-5P

覚え書き 註(5)ロツチェに言及

(四)『ドイツ・イデオロギー』の編輯と執筆期の兩人の関係

「この第一篇の原稿は、(1)大小二つの束からなる。(2)そのうち大きい束は Urtext (原本)である。しかもそれは、第二篇「聖ブルーノ」第三編「聖マックス」といった篇別構成が確立する以前の龐大な原稿から撰り残されたものである。(3) このウアテキスト執筆者はエンゲルスであり、極めて多くの抹殺・修正・加筆がおこなわれている。(4)そのうえマルクスによる補筆・修正・欄外書込も相当の量にのぼる。／エンゲルスの文章とマルクスの修正・加筆した文章とを比較してみると、兩人の見解にはまだ相当の距たりが見られる。ありていに云えば、マルクスの方がいかに甚だしく立遅れていたか、また唯物史観は主として専らエンゲルスの創見によるものであってマルクスはむしろエンゲルスに学んだということ、これが判る。」 97-8P

『ドイツ・イデオロギー』では、共産主義論が主題的に展開されているわけではないが、エンゲルスの手稿には当然それに関わる論点が含まれている。共産主義革命と従来の革命との根本的相違の解明。プロレタリアートが先ず国家権力を掌握し自らを一旦支配階級に高めるべきことについての国家の本質規定にもとづいた説明。被支配階級が旧い垢を浄め新世界の建設能力を身につけるためにも革命の鉄火が必要だという議論、その他論点は多岐に亙るが、(イ)共産主義社会が、単なる財産の共有制にもとづく社会としてではなく、固定化された分業のない社会として描かれていること(手稿一七頁)および、(ロ)後年のキャッチフレーズで云えば、必然の王国に対する「自由の王国」として立論されていること(手稿一八、五五―五九頁)、この二点が特に注目される。」 98P

「・・・・・・ともあれ、先に引用したマルクスの書込み(「共産主義はわれわれにとっては、打建てられるべき或る状態(社会体制)ではなく、・・・・・・」)は、その当座のマルクスが、まだ共産主義という打建てらるべき社会体制、窮極的な社会体制としての共産主義を考えていなかったということを証明している。」 99P・・・わたしの『ド・イデ』読書メモの修正の必要

「かくして『ドイツ・イデオロギー』執筆時の或る時点まで、共産主義論に関してマルク

スとエンゲルスとの間には見解の相違が存続していたこと、少なくともこの面ではエンゲルスの方が前進していたこと、これは否めないところである。・・・・・・」 100P

(五)エンゲルスの唯物史観・共産主義論

「エンゲルスがイデオロギーと呼ぶのは——マルクスの補筆・修正と対照するとき、マルクスの語法とは必ずしも一致しない——歴史的諸形象をイデーの Inkarnation(化肉)、Verwirklichung(現実化)として考える発想の謂いである。従って、それは彼のいうイデアリスムスの歴史哲学版とも云え、このかぎりでは彼は idealistisch という言葉と ideologisch という言葉とを屢々混用している。彼のいうイデアリスムスは、ヘーゲル哲学が典型をなすように広義の自然全般をイデーの Verwirklichung、イデーの Abbild(模像)として、遡っては“精神”の自己疎外態として把える立場を指し、イデオロギーとは、狭義の自然に関してはその Ursprünglichkeit (根源性)を承認しつつも、こと歴史の方面に関してはイデーの Verwirklichung を立論し、ヘーゲルの“精神”の残映たる「自己意識」「人間」といった“実体化された主体”の自己疎外過程として歴史を考えて行く発想の謂いである。／ここにおいて、エンゲルスのイデオロギー批判は、歴史を「人間の自己疎外と回復の過程」として把える発想に対するに帰着する。かかるイデオロギー批判を展開するためには、狭義の自然と同様、歴史的形像が自体的に存在性をもち、歴史的イデーに先立ってそれ自身の自然史的法則をもつことを解明しなければならない。この作業を、エンゲルスは、「自然をも非有機的肢体とする」ごとき「人間」「類的存在」とは対蹠(たいせき)的な「飲みかつ食わねばならぬ有体的(「ライブハフト」のルビ)な諸個人」から出発し、分業を分化の原理としながら遂行する。それを通じて、トータルな歴史把握を提示するにとどまらず、彼は何故また如何にしてイデオロギー的顛倒が生ずるかを説明してみせるのである。／ここでは行論を辿る余裕を欠くが、次の事実を指摘することによって、彼の到達した思想水準をとその内容とを端的に示唆することができよう。それは、後年のマルクスがいわゆる“唯物史観の公式”として定式化した諸論点が、いずれもほぼ完全な形でエンゲルスのウアテキストのうちに現われているという事実である。・・・・この後詳しい説明・・・・」 101-2P

「・・・・・・ここでは右に紹介した事実——これによって、エンゲルスの到達した思想水準とその内容の大略は察知されるであろう——に関連して次の二点だけを取り上げておこう。／その一つは出発点と展開の原理に関わる。エンゲルスは「有体的な諸個人」という出発点から社会関係を立論する際、かなり強引な議論を進めている。彼は下層という端的な社会関係と男女間の分業を立論し、且つは「家族のうちに潜在的に存在する奴隷制」(手稿一七、六八頁)を媒介項として財産、ひいては「市民社会」に説き及んでいく、さなきだに分業という概念を階級すら分業の下に包摂されるほど広義に用い、この「分業」を行論に槓杆にしている。・・・・次の段落でこのエンゲルスの論攷へのマルクスとの対比もしていますが、エンゲルスの分業論は差別ということと相即的にとらえるわたしの観点からして、階級も分業の下に包摂するとう観点には、わたしも共鳴するのですが、「家族のうちに潜在的に存在する奴隷制」という立論は、性差ということを差別の根源におく、物象化に陥っているととらえられます。この後に出てくるマルクスや廣松さんは、分業の起源を共同体間の交換というところにおいてとらえていたことに照らして、このエンゲルスの立論が、フェミニストから批判されている『家族・私有財産・国家の起源』にまで及んでいる

かの検証が必要になります。／このような筋立てに対してマルクスが積極的に賛成だったのかどうか、手稿への書込からは何とも云えない。しかし、(イ)『経哲手稿』や『神聖家族』での議論は措くとしても、(ロ)今問題にしている共同作業の直後に書かれたアネンコフ宛の手紙や『哲学の貧困』にはそのような姿勢がみられないこと、(ハ)『経済学批判要綱』の時点ですら *Stammwesen*(種族存在)として改釈しつつ *Gattungwesen*(類的存在)から出発しており、(ニ)その後においても、分業の端初を共同体間分業に求め、これを介して私有財産制と階級分化の歴史的成立を説く姿勢をもっていること——しかるにエンゲルスの方はその後も「内因論」の姿勢を崩していない——。これらの事情を思い併せるとき、果してマルクスが賛成であったかは多分に疑問の余地がある。しかしともあれ、諸個人から出発し、内的分業を槓杆にすることによってのみ『ドイツ・イデオロギー』での唯物史観がはじめて可能になっていること——唯物史観の *Autorschaft* (作者)にも関わる問題として——この点には飽くまで留意すべきであろう。・・・分業に留目したこと自体の評価として／もう一つ取上げておきたいのは、自己疎外論をめぐることである。マルクスは、手稿の初めに近い個所に、「哲学者たちに判る言葉でいえばこのような『自己疎外』は」云々という加筆をおこなっているが、エンゲルスは説明の便法として疎外という言葉を用いない。彼が用いているのは唯一ヶ所である。その個所たるや、ウアテキストの事実上の結論部に相当し、イデオロギー的顛倒がいかんにして生ずるかを論決する条りである。」103-4P・・・その条りはこの後に掲載されています。

「ここで附記したいのは、第二篇「聖ブルーノ」以下の原稿には——それは明らかにマルクスの補筆を経て清書たれたものであるが——共産主義を単なる「運動」としてではなく、まさしく「打建てらるべき社会状態」として立論した個所が幾個所も存在するという事実である。前節で指摘した「見解の相違」に鑑みると、この点に関してはエンゲルスがマルクスを説得したものと考えざるをえない。」105P

(六) マルクスを実践的活動に誘う

「共産主義理論に関してマルクスを説得(?)したエンゲルスは、彼がバルメンで開始していた実戦運動の方面でもマルクスを僚友にした。四六年の五月『H・クリーゲに反対する回状』を契機にマルクスも初めて実践運動への姿勢を示しはじめ(?時期が三ヶ月遡るという「選書版あとがき」にて指摘)、エンゲルスと共に「共産主義通信委員会」の仕事を推進する。／唯物史観の確立によって、①必然の王国の成立と存立の歴史的必然性、②それが共産主義に取って代られる現実的諸条件と必然性、これを社会科学的に説明し、四三年以来の提題に「科学的な」基礎づけを与えするに至ったエンゲルスは、ドイツ革命のプログラムを建て直す。それまでのエンゲルスは、ドイツが英仏に比べて一段階前の社会構成体にあることを認識していなかったため、ドイツ革命も直接に共産革命たりうると考えていた。しかるに今や、来るべきドイツ革命はブルジョア革命であることを知った。・・・・・・」106P

「イギリス支部と通ずる傍ら、パリ支部を「寝返らすことに成功」していたエンゲルスは四七年夏、義人同盟の大会にパリ支部を代表して出席し、同盟の組織化、ワイトリング主義からの脱却と「共産主義者同盟」への改称をかちとり、同年十一月の大会には綱領修正案『共産主義の原理』を帯同し、マルクスと共に綱領の起草を一任される。」107P

「その際、経済学研究の先鞭をつけたという点は措くとして、共産主義理論と唯物史観とのいずれの方面においても、エンゲルスの方が先行しかつ主導したということをわれわれは認めなければならない。」 108P

「・・・・・・・・二つの独創的な知性が全く同じ音色を奏でるということはおよそありえないことであって、現に弁証法についての考えかた、上部構造と下部構造との相互作用、ひいては決定論・非決定論の問題、さらには人間論の翳りなどの点で——彼ら自身は殆んど自覚していなかったにせよ——今日のわれわれの眼からみれば、単にニュアンスの差といっただけでは片づかないものが残るように思われる。これら可成り重要な論点での案外の相違をも勘案しつつ、マルクス主義を全体として周到に理解するためには、両人の思想形成過程の経緯と「持分」とを一旦ほぐしてみる作業が是非とも必要な筈である。このささやかな小稿がそのための捨石となりうれば幸である。」 109P

補遺 いわゆる“口実筆記説”に寄せて

「・・・・・・・・われわれは、前もって話合ったものを云々というマイヤーの説、口述筆記云々というリャザノフの説、そして、口述筆記とはいかぬまでもマルクスのメモをもとにしたのではないかという可能的な第三の説、これらを同時に射程に収めながら検覈することにしよう。／最終的には思想内容そのものと両人がそれまで辿ってきた思想形成の経過から論すべきであるが、——拙著『エンゲルス論』参照——差当り、エンゲルス筆跡の旧層の文章とマルクスの追補した文章を比較してみると次のことが判る。／(ここから段が下がっています) (一)『プロレタリアートに関するテーゼ』や『経哲手稿』の立論となる文章が、たしかにこの未定稿にも再現しているが、それらはすべて——敢て唯一つの例外もなく云おう——、マルクス自身があとから追補したものであって、エンゲルスの地の文にはみられないこと。／(二)若干の基礎的なターム、例えば、「イデオロギー」という言葉の用法が兩人の間で異なること、また例えば「自然生的」*naturwüchsig* といった、特殊な意味で用いられている或る種の言葉が混在しないこと(つまり、それまでの一方だけが用いていたタームはこの遺稿でも一方だけが用いていること)、右の事実は措くとしても、生産力という基本的概念——従ってそれは頻々と用いられているのだが——を表わすのに、マルクスは一貫して *Produktivkraft* とその複数形 *Produktivkräfte* を用いているのに対して、エンゲルスは最旧層では必ず *Produktionskraft* とその複数形 *Produktionskräfte* を用いていること。(註)／(三)これは兩人の文章の比較というよりも、むしろもっぱらエンゲルスの *Urtext* にかかわることであるが、マルクスの修正、エンゲルス自身による加筆を除去して原型にもどしてみると、行論が整理されておらず、思い付くままに書きなぐったという観が深い。(旧来の版本で「歴史」という標題のついていた個所、すなわち、唯物史観の前提を定立し、歴史の基本的な四つの契機を打出している個所などを想起されたい！ 実は、それでさえ加筆修正され、“改善”されている)。(ここで段下げが終わっています)／手稿における兩人の思想的な喰違いを詳細に指摘するまでもなく、右の三つの事実だけを以ってしても、すでに件の諸説を卻けるに十分であろう。口述筆記やメモによる記述であれば、(一)(二)の現象は生じえまい。(三)の事実は、リャザノフには恐らく口述筆記の印象を与えたであろうが、論点も整理せずに口述するとは！ 何と失礼な所業ではないか！ われわれは(一)(二)の事実と併せることによって、(三)の事実自体、予備的な討論も、況やメモも

ないままに、一気呵成に書き下ろされたことの一証左とみる。・・・・・・」 115-6P

(註) この「生産力」のドイツ語用語のマルクスとエンゲルスの違いの廣松さんの指摘は、『著作集第八巻』でのこの『マルクス主義の成立過程』の当該の箇所で「編者註」がついていて、その後の新たな補正的なことも書かれています。ただ、語法の違いから、口述筆記説批判に活かす、という主旨には変更はないとはいい得ると思えます。

『ドイツ・イデオロギー』の編輯について

——東ドイツ新版の出現を機に

「若き日のマルクス・エンゲルスがJ・ワイデマイヤーと大先輩のモーゼス・ヘスの協力を得て書き遺した(四人の共同執筆)『ドイツ・イデオロギー』は、原稿がほぼ完成された時点で出版契約が破棄されたまま八十余年も埋もれてきたが、この遺稿は、マルクス・エンゲルスが、先輩ヘスの“エピゴーネン”として出発しつつ、彼を次第に乗り超えて、唯物史観を確立した記念碑的な文書である。ところが一九三二年、スターリン時代にはじめて“公表”されたこの遺稿の底本 MEGA.1.Abt.5.Bd.は、手稿を甚しく誣いるものであって、局限すれば“偽書に等しいもの”になり了っていた。この事実は、一部識者の間では夙に知られていた筈であるが、スターリン時代の終熄十年にして昨今ようやく手稿の原型を回復する運びとなってきた。／一九六五年のソ連版に続いて、さらに改善を加えたドイツ語版が一九六六年の秋、東ドイツで発表された。これら二つの新版は、成程、「旧版を典拠とした従来のマルクス《解釈》を根底から覆す」ものではある。しかしながら、筆者のみるところ、これらの新版は依然として「遺稿の資料的価値を事実上、無に帰するほどの重大な欠陥」を免れていない。そしてはやくも、この欠陥が陥穽となって、誤ったマルクス《新解釈》が横行の兆しをみせている。／筆者は、偶々『ドイツ・イデオロギー』旧版の“編輯”に疑問を懷き、手稿復元の手だてがあることを知って“自家用版”を準備し、筆者なりの復元・編輯案を提唱してきたが(本書所収「『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点」、以下「旧稿」と略記)、その後、上記のソ連版が発表された関係もあり、ドイツ語版新版の一新を待つ心境に変わっていた。しかるに前記の始末である。ここに再び『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点について卑見を述べ、新版の批判に即して代案を提出することにした。」 126P

一 編輯を必要とする理由

「『ドイツ・イデオロギー』の遺稿は、二巻本用六篇(見方によっては七篇)の草稿から成っている。その第一篇が「一、フォイエルバッハ、唯物論的な観方と観念論的な観方との対立」である。この第一篇は——逐条的な批判を内実とする他の諸篇とは異って——原著者たちがここで積極的に自説を展開しており、歴大な遺稿の白眉ともいうべき部分である。ところが、晩年のエンゲルスも確認している通り、肝腎なこの篇は未定稿のままである。このため、他の五篇の清書稿とは異って、特に第一篇の処理が問題になる。諸版の異同を生ずるのも専らこの篇に関してである。／・・・・・・問題の草稿は、一続きの書き下ろしではなく、／(1)審級のいくつかの層から成り、その一部は下書き・異稿・改訂稿・浄書稿といった内的対応関係をもっており、しかもここには『ドイツ・イデオロギー』全六篇の最旧層と最新層との両限が含まれている。／(2)当時まだ思想形成の途上にあった二人の著者の合作であり——この篇に関してM・ヘスは、直接には手を貸していない——、しか

も両人の意見がまだ完全には一致しておらず、基本執筆者エンゲルスの文章に、マルクスが抹殺・修正・加筆を施しており、それをさらにエンゲルスが補修している。のみならず、多くの欄外書込みや符牒があり、改稿のためのメモもついている。／(3)元来は別々のコンテキストで書かれた断案から成るとはいえ、補筆・修正を注意ぶかく追跡してみると、手稿の各断簡が有機的な構成成分に変えられており、適当に配列・按分してみれば、断片の集塊から一転して、草稿の全体がほぼ纏まったかたちに構造化される。／このような特殊条件をもっているために、編輯の仕方如何では、(イ)雑然たる断片——しかも相当量の欠損・散佚(さんいつ)があると見らるべき断簡の集積にもなれば、(ロ)ほぼ纏まりのある——しかも“欠損部”を改訂新稿で埋められた有機的な全体にもなり、そのうえ、(ハ)各種符牒を手掛りにして“予定されていた組替え”を施すべきではないかという問題すら生ずる。という次第で、手稿を片端から活字に移すだけでは済まない。／だがまさしく上の(1)(2)(3)故に、もし編輯が正鵠(せいこく)を得るならば、①新旧層を比較対照し、且つは補修・推敲を追跡することによって、思想形成の進行状況、唯物史観の確立過程を追認することができ、②誰のいかなる語句や文章を誰がどう修正しているか、両人のうち一方だけに固有な着眼と発想は何か、これを知ることによって両人各々の果した役割と持分をクローズアップできる。また、③当時における唯物史観の構想を窺うと同時に『ドイツ・イデオロギー』を転換点とする自己疎外論の遷移を全体的な構想との関連で知ることができる。」127-8P

「ここで、両新版に対する批判の論点を前以って掲げておけば、新版は右の①②③を保証せぬどころか、再び覆いかくす編輯に終わっている。——遡っていえば、前掲(1)(2)(3)の特異生に由来する格別な資料価値を台無しにして、再び誤ったオリエンティールングを必然化する結果に終わっていること、この一言に括ることができる。」129P

二 草稿の外観・層別・組成

三 旧版と両新版との異同

「・・・・・・この版(アドラツキー版)の原版では、本文でこそ推敲された最後の文形での素材がつぎはぎされているが、本文には採録されなかった字句、つまり抹殺された字句や修正された元の字句、ならびにまた、欄外書込み、符号、割線、補筆・修正の筆蹟、等々、およそ手稿に見出される一切の事実が、脚註や巻末の *Textvarianten* などで詳細に報告されている。(この限りにおいて、アドラツキー原版——流布版はしからず——では、手稿の各頁を復元するための手掛りが与えられていた。この原版には手稿の写真版も数葉添えられている。筆者が手稿の各頁を表象しえたのは、リヤザノフ原版とこのアドラツキー原版との詳細な記載に拠ってであった。)」134P

四 両新版の不備と欠陥

「・・・・・・ここではまず、一見“些末”な不備によって、新版では『ドイツ・イデオロギー』の特殊格別な資料価値が全く失われて了っていることを指摘しておきたい。／・・・・・・／第一に、唯物史観の確立過程を知りうべき折角の資料価値が失われている。原著者たちがまさしくこの手稿を通じて唯物史観を確立したという特殊事情から、もとの文章、修正の過程、最終の文案、この三つを知ることによって、唯物史観の確立過程を追認することができる。そのためには、数次に互って、かも可成りの時間を隔てて(?)おこなわれた補筆・修正に関しての、精緻な記載が不可欠である(*)。／(小さなポイント

での段落下げの註)* 手稿の旧層には、その直前に発表されたヘスの或る論文と瓜二つの条りさえ見出される。ともあれ協働 *Zusammenwirken*, 交通 *Verkehr*, 生産力 *Produktionskraft*, といったヘスの概念と発想に拠った地の文に、分業の概念を持ち込み、ヘスのいう「協働関係」を補修しつつ、交通関係、ひいては生産関係といった概念に至り、これをヘス以来の生産力概念と関係づけ、さらには下部構造・上部構造の発想を根づかせていく。——このような過程が、手稿への手入りを跡づけることによって可成り鮮明に浮かびあがる。この間の事情を分析し、ヘスの果した媒介的役割という論点をも射程に収め、唯物史観の確立過程を追跡するためには、加筆修正された最後の文形を掲げるだけの新版ではものの役には立たない。／第二に、マルクスとエンゲルスの各々の“持分”を明別しうべき格別な資料価値が失われていること。エンゲルスの地の文、マルクスの修正、エンゲルスの再修正、これらを比較することによって、この手稿は兩人各々の貢献を知るための恰好な資料となる筈であるが、新版ではその別が殆んど報告されていない。エンゲルスが折角に用いた「生産関係」を消して「交通形態」にしたのは一体誰か、エンゲルスの展開した共産主義社会論をマルクスがいかに転覆しているか、疎外論に対する態度の相違とやがての一致、イデオロギーという言葉の用法の相違、等々、重要な手掛りが新版ではつかめない。あまつさえ、手稿に見出される特殊マルクスの諸提題は、彼自身による事後的挿入であることの報告を欠くことによって、新版は旧態依然として“口述筆記”説の妄言に途を残している。／第三に、草稿全体を構成し、その内的聯関を研究するための手掛りが全く奪われていること。 . . . この後、*具体的例示* . . .」 137-9P

五 草稿の内部構成の認定

「十全な考証を割愛するのほかなかったことは遺憾であるが、筆者はここで再び、前掲の配列を執り、かつ手稿に見出される一切の事実を精緻に記載報告することによってこの手稿の特殊格別な資料的価値を完全に発揚せしむべき(註1)新編輯を提案して止まない。／かくのごとき一見些末なテキストクリティークによって、唯物史観の確立過程にいかなる光が投ぜられ、またこの史観の全体像がいかに変貌するか、これは続稿の問題とならねばならない。／(小さなポイントでの段落下げの註)(1) 『経哲手稿』当時のマルクスは、ヘスの“エピゴーネ”だとはいっても、まだフォイエルバッハとヘスの中間の立場にあり、翌年の春(つまり『ドイツ・イデオロギー』の執筆の年)『フォイエルバッハに関するテーゼ』ではじめてほぼヘスの立場からフォイエルバッハを批判するところまできた。一方エンゲルスは二年以前からヘスよりも左寄りの立場に立ってはいたが、本文中でも指摘した通り、旧層ではまだ多分にヘス的な議論から出発している。／ 従来研究者たちが意識的に(?)無視してきた一八六八年に“唯物史観の根本に関わる点で生じた”マルクスとエンゲルスとの“一寸した意見の対立”の素地が、すでに『ドイツ・イデオロギー』の時点から胚胎していたことが判る。」 145-6P . . . この最後の指摘を検証すること—

『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点

「現行版『ドイツ・イデオロギー』は事実上偽書に等しい。」 148P

「この間の事情を識るためには、予め二つの神話を払拭しておかねばならない。／(1)原稿は未完成であったこと。 / (2)執筆者は主としてエンゲルスであること。」

「リヤザノフとアドラツキー版の編輯者P・ウェーラーとは、編集方針の点では正反対の態度をとっておりながら、実は共通の認識に立脚している。それは現存の原稿では、「第一篇、フォイエルバッハ、唯物論的な観方と観念論的観方との対立」が形をなさないという判断である。ここから、リヤザノフはもっぱら素材の紹介をむねとし、ウェーラーはこの素材をもとにして、換骨奪胎的な再構成に腐心することになった。／ところが、吾々の見るところでは、現存する原稿だけで一応のまとまりをもっている。……」 150P

「……人はまず、マルクスが加筆修正の途次で原稿に付けなおした頁番号の順に草稿を配列し、頁づけのとんでいる幾つかの個所に“小さい束”に見出される改訂浄書稿を按分すればよい。このような至って簡単な手続きによって、改訂さるべき個所を内部に含むとはいえ原稿は一応のまとまりをみせる。／もとより、事はそれほど単純ではない。右の点を立証し、第三の編輯を提案しえんがためには、文献学的な研究を必要とする。吾々はまず、(一)利用しうる資料を確認し草稿の状態を概観したうえで、(二)アドラツキー版への批判、(三)リヤザノフ版への言及を経たのち、(四)新しい編輯案の大綱を提出するであろう。」 151P

「……新しい編輯というよりもそれに並行する文献学的な検討を通じて、／第一に、唯物史観の形成過程と最初の展開が明晰に浮かびあがること、／第二に、『経哲手稿』での自己疎外論が、どのようにして止揚されるに至ったかが明確になること、／第三に、唯物史観の形成に対するエンゲルスの参与が、どの程度であり、そこにおけるエンゲルスのオリジナリティがどの点にあるかが明瞭になること、／以上の三点は敢て記しておきたい。原稿版ではこれら三点が完全に覆いかくされてしまう。この一事に鑑みても現行版は批判を免れないであろう。特に第三の点は、旧来の通説を覆すほどの重みを持っており、ことによれば「唯物史観の創始者はマルクスというよりもむしろエンゲルスである」という嘗つて一部識者の間で囁かれていた噂話——晩年のエンゲルスが骨折って打消した“史実”——を金文字で綴り直すことになるかもしれない。……」 152P

一 資料の確認と草稿の概観

「(1)尤も、両版の間では字句や句読点の判別しかたに関して若干の相違がある。この点については、原稿そのものを見ない限り最終的な判定は不可能であるが、本稿での討究範囲ではこのような細かい点は決定的な意味をもつまい。」 154P・・・この「細かい点」を新MEGA版の『ドイツ・イデオロギー』が出た際に、原稿そのものの写真版があるアムステルダムまで行き、「原稿そのもの」の写真版を点検し、それを元に廣松版の批判として渋谷版が出ています。それを、岩波文庫版の廣松訳・編の岩波文庫版で補訳者の小林昌人さんが、取り込んでいます。なぜか、渋谷さんは「討究範囲」という観点がないのか？ その後の廣松理論の展開を見れば、判ると思うのですが。

二 アドラツキー版の検討

三 リヤザノフ版の問題点

四 新しい編輯のために

「……この客観的事実としての“疎外”がなぜ起こるかを問題にし、「一言でいえば分業」を以って答えている。」 187P

【附】Ⅰ『ドイツ・イデオロギー』ソ連新版について

【附】Ⅱ『ドイツ・イデオロギー』新版が投じた東ドイツ哲学界の新しい波紋

「従来の“正当派”マルクス主義の体系では、弁証法的唯物論(これに模写説的認識論も含まれる)という第一哲学を歴史の領域に適用したものとして史的唯物論を位置づける傾きがあった。これに対してザイデルは、史的唯物論——厳密にはその中心カテゴリー——を体系の中核におくべきことを主張する。／「実践というカテゴリーは、普通にそう解釈されているように単に史的唯物論の中核点に位するのではなく、まさしくそこに位するが故に、マルクス主義哲学の全般の中心カテゴリーなのである」。唯物論の歴史・社会への“適用”に先立って、“物質と意識”との本源的な関係ならびに自然一般の普遍的法則として叙述されるがごとき弁証法的唯物論においては、人間的実践——これは本源的に歴史的・社会的な性格規定をもつものであって、動物の条件反射的運動とは質的に区別される！——はその座を占めることができない。／旧来の弁証法的唯物論では、まさしくマルクスのテーゼがいう通り、対象は専ら「客体ないし直観の形式においてのみ」とらえられ、人間的活動・実践としてはとらえられない仕儀に陥っている。そして、認識の歴史的・社会的被制約性の認識論的構造が不明のままに終わっている。旧来の“体系”では弁証法的唯物論と史的唯物論とを真に統一することができない。自然的・社会的環境世界に対する人間の実践的関わり——この唯物史観の基本的視座を出発点とすることによってのみ、体系的整合性もはじめて保証される。」 202P

「少なくともデカルトのコギトー以来、哲学体系の出発点の問題が思想家を動かしてきた」。スピノザは「実体」を体系の基礎におき「世界の多様」を演繹した。これと対蹠的に「フィヒテは自己意識の活動、自我の事行を出発点にした」。ヘーゲルはスピノザの実体とフィヒテ的自己意識の媒介的統一を「精神の活動」のうちに求めたが「問題を解決することができなかった。」。マルクスの実践概念こそ、ザイデルよれば、まさしくこの問題を解決するものである。／ともあれ、マルクス主義哲学がスピノザの実体主義とフィヒテ的自己意識主義との止揚に立脚することは『神聖家族』の有名な条りからしても明らかである。しかるに「マルクス主義哲学(特にプレハーノフから出発する)の多くの叙述は、スピノザ主義の影響を受けている」。「マルクス主義哲学の歴史にスピノザの及ぼした影響の批判的な分析はまだおこなわれていない」。ザイデルはこう述べて「スピノザ主義の実体、つまり“人間から引き離して形而上学的に改作した自然”を体系の出発点にする」ロシア・マルクス主義哲学に対する決定的な批判を暗示して憚らない。／「マルクス主義実践概念」から出発するとき、フランス唯物論に弁証法の形骸を接ぎ木した“俗流唯物弁証法”の転覆だけでは済まない。／人間が実践的に関わり合う環境(自然的・社会的)は、諸個人にとってこそ原的に与えられる所与であるが、歴史的・社会的にみれば人間の実践によって変様されたもの乃至は形成されたものである。『ドイツ・イデオロギー』を援用していえば、人間をとりまく「感性的世界は産業と社会状態の産物」であり、外的自然の先在性は疑いえないが、しかし「そもそも人間の歴史に先行する自然なるものは、新生の珊瑚礁上の自然ならいざ知らず、今日ではもはや存在しない」。人間から引き離された自然は人間にとって「一つの単なる抽象」たるにすぎない。「われわれ人間の実践的・理論的活動によって対象がわれわれにとっての対象(Gegenstand für uns)となるまでは——とザイデルはいう——それに先

立って、対象のそれ自体としての存在(An-sich-sein 即自存在)について原理上何ごととも立言できない」。／この見地を貫くとき、レーニン哲学にいう「物質」はそれこそ「一つの単なる抽象」にすぎぬ「即自存在」として排去さるべきものとなり、この即自存在に関わるレーニン流の模写説もまた維持されがたいものとなることは見易いところである。／それどころではない、ザイデル論文は、即自存在に立言することを自ら禁じてフェノメナリスティックな視界にとどまりつつ、しかもフェノメナルな世界の全体を「感性的・対象的活動」による被媒介性において——カント的構成ではないが、歴史的・社会的人間活動の“構成”の所産として——把える立場(『ドイツ・イデオロギー』には一つの姿勢としてたしかにこれが存在する)、このような立場をインプリシットに措定している。／東独哲学界の新しい動きは、一言でいえば、“ロシア・マルクス主義哲学”の全面的な止揚にとどまらず、従来「即自存在」の法則として立言されてきた自然弁証法、ひいては唯物弁証法そのものを解消して、唯物史観の視座のもとに世界の全体を体系化する一種の歴史的構成主義とでもいふべき方向を指向している、ということができよう。わたしの見るところ、ザイデル論文には『ドイツ・イデオロギー』新版の依然たる欠陥に禍いされた一面があり、そのことに負うてまた『経哲手稿』との接続を強行していること(これ自体東独では新奇であるが)、等々、マルクス解釈の次元では若干の異論なきをえない。しかし解釈ではなく体系的な展開こそが問題であるかぎりでは、以上の簡単な紹介とコメントからしても、ザイデルの巻頭論文が象徴する東独哲学界の動きには留意を促すに足るものがあるだろう。」203-4P・・・廣松さんのレーニン批判で、それにもかかわらず革命的実践においてマルクス・レーニン主義に陥っているのでしょうか？

『ドイツ・イデオロギー』の文献学的諸問題

——新MEGA(試行)版に寄せて——

これの旧稿は前章であり、この原稿は、新MEGA(試行)版へのコメントと旧稿の再論になっています。アカデミックな論稿になっていて、運動論的なところから押さえる作業をしているわたしとしては読み流してしまいました。

一 新MEGA(試行)版の内容と問題点(斜体文字はわたしが付けた標題—以下同じ)

二 新MEGA(試行)版『ドイツ・イデオロギー』に関しての問題点

「・・・・・・しかし、ともあれ新MEGA(試行)版で一応の見当をつけて、アムステルダム詣でをするという道があるのであるから、これは特質しておくに値すると思う。」221P・・・廣松さんも『ドイツ・イデオロギー』の編輯問題だけに特化するならば、アムステルダム詣でをするという道(渋谷さんが採った道)を採ったのかもしれないのです。

三 廣松編輯案と河出書房版の特質と『ドイツ・イデオロギー』全体の構成

「バガトゥーリアおよび新MEGA試行版の編輯者は、ヴィーガント社刊の季刊誌の第三号に接したことが『ドイツ・イデオロギー』執筆の直接的な機縁であったと推定している。ここであらかじめ念頭におくべきことは、前年すなわち、一八四四年の秋時点に、マックス・シュティルナーの『唯一者とその所有』が公刊され、一八四五年の二月にはマルクス・エンゲルスの共著『神聖家族』(つまり、バウエル派を批判した労作)が刊行されていること、そして、五月にはエンゲルスの大著『英国における労働者階級の状態』、六月には、ヘスの『最後の哲学者たち』(つまり、バウエル、シュティルナー、フォイエルバッハの三人

を批判した小冊子)が刊行されていること、さらにはヴィーガンツ社の季刊誌の第二号には、フォイエルバッハの『唯一者とその所有』との関連における『キリスト教の本質』(つまり、シュティルナーの批判に対する反批判)が出ていることである。まさしくこのような三つ巴、四つ巴の論争状態にふさわしく、ヴィーガンツ社の季刊誌の第三号には、バウエルの論文とシュティルナーの論文とが載っている。バウエルは、フォイエルバッハの性格づけをおこない、その“亜流たるマルクス・エンゲルス”の『神聖家族』に反批判し、ヘスの『最後の哲学者たち』にも反批判している。シュティルナーは、これまた、前号に載ったフォイエルバッハの論文に反批判し、ヘスの『最後の哲学者たち』にも反批判している。このヴィーガンツ社の季刊誌の第三号を読んで、当時親密な間柄にあり、“亡命地”ブリッセルで、文字通り軒を並べて住んでいたマルクス・エンゲルス・ヘスの三人が反批判を決意したという次第なのである。」239-40P・・・『ドイツ・イデオロギー』執筆の直接的機縁

四 第一篇「フォイエルバッハ」の原稿の性格と成層に関する分析的検討

「・・・・・・現存する第一篇の大きな束は、エンゲルスが後年、マンチェスター時代を回顧して次のように書いていることを髣髴(ほうふつ)たらしめる。「私がまざまざとみせつけられたものは——経済的事実は、これまでの歴史的記述では全然なんらの役割も演じていないか、せいぜいのところ、とるにたりない役割しか演じていないが——経済的諸事実こそが、すくなくとも近代世界では決定的な歴史的力だということ、この経済的諸事実が今日の階級対立の生ずる基盤であり、大工業のおかげで階級対立が十分に発達した国々、したがってわけてもイギリスでは、この階級対立がこれはこれでまた、政党の形成の、党派闘争の、従ってまた、全政治史の基盤をなしているということである、云々」・・・・・・」256P・・・エンゲルス発の唯物史観という廣松さんの論拠

「・・・・・・基底稿と改訂稿とを対照し、両者のあいだに矛盾や不協和がみられる場合には、改訂稿に即して理解すべきであって、同じく遺存するとはいっても、そのような個所では、旧層の主張は是正されたものと了解すべきであること、これは言わずと知れたことの筈である。しかるに、旧来は、とかく、矛盾や不協和を解消すべく、無理に第三の折衷的な線で改訂してはいなかったか？ また、手稿の文章は、往々、余りにも添削されすぎているため、しかも、相異なる時点で二度・三度と修正されたため、文法的に崩れてしまっている場合が少なくない。辛うじて文法的には体をなしてはいても、文意が多義的に解釈できるようになっている個所が非常に多い。そのような個所では、添削過程を参照することなしには、とうてい正しい解説は不可能である。しかるに、旧来は、もっぱら最終の文形だけによったため、その範囲ではなるほど文法的・語学的にそう読めても、時として実質的には見当違いな読み方をしてはいなかったか？ これは、決して筆者独りの杞憂ではあるまい。が、既に多くを語りすぎたことかと惧れる。」265-6P・・・廣松さんが『ドイツ・イデオロギー』の編輯問題に拘る注意点

『ドイツ・イデオロギー』研究の現段階

——手稿復元(河出書房)版を編んで——

一 河出書房版の意義

「・・・・・・私にいわせれば、これまでの各版の編輯者たちは、第一篇の手稿がもっている内的な構造・連関を見落しており、その結果として、編集的配列の面でも不備を生じ

ている。この点をも是正する必要があるということで、私としては——先ほど申した意味での準写真版方式の手稿復元だけでなく新しい編輯的配列をも試みた次第なのです。」271P

二 手稿復元版の特徴

「……………底本ということでは、四つに限ることができます。第一は、一九二六年に『ド・イデ』第一篇の部分の手稿を初めて活字化して紹介したりヤザノフ版。……………／第二は、一九三二年に旧メガ第五巻として出たアドラツキー版で、……………／第三は、一九六六年に出た東独版で、これは前年に出たバガトゥーリヤのソ連新版と同種のものです、……………／第四は、いよいよ来年(一九七五年)から二十五年がかりで出る予定の新メガ、これの試行版として一九七二年に出たものですが、これには抹殺部分や修正過程なども巻末附録の形で報告されております。全集ということになるとこういう方式を採らざるをえないのかもしれませんが、この巻末附録というのがまるでクイズみたいな標記方式になっている本文(これは最終文形のみを印刷)と巻末附録を丹念に読み比べながらクイズを解いていけば、添削過程を追認できるとはいえ、実用生という点ではどうでしょうか。抹殺・修正、加筆、添削の過程が一目でパッと判るという具合にはなっていないわけです。」271-2P……………廣松さんはアドラツキー版を編輯し直すという形で、それに新メガで校正していくという手法を採っているようなのですが、直接新メガから編輯しなかった訳がここに書かれています。

三 基底稿と最終文形

「一般論といっても、次のようなことはくどくど申すつもりはありません。つまりマニユスクリプト(手書き原稿 manuscript)を読む場合には、書いたり消したり修正したりというテキストの成立過程が判るので刊本よりも理解が深まるし、しばしば最終文形からは想像もつかなかったような意味が浮かび上がってくるということ、とりわけ、手稿にあとの時点で加筆・修正がある場合には、その期間における著者の思想的進展を窺い知ることができ、思想の確立過程を追跡できるということ、——……………」274P

四 独仏年誌と『ドイツ・イデオロギー』

「マルクス・エンゲルスが『ド・イデ』を書くことにした動機は、大雑把に言えば、マックス・シュティルナーが『唯一者とその所有』のなかで『独仏年誌』の論文に批判を加えたのに反批判を書くこと、それからまた、ブルーノ・バウエルが「ルードヴィッヒ・フォイエルバッハの徳性描写」という論文のなかで、マルクス・エンゲルスの共著『神聖家族』に反批判を加えてきたのに応戦するということ、こういう論争にあったわけです。」278P

「そこで、彼らとしては、一方では『独仏年誌』の時代このかたすでに新しい知見に達していたのだということを言うと同時に、他方では、現時点ではそういう水準からもはや大きく前進しているということを誇示しようとするわけです。実際問題として『独仏年誌』の時代にすでに……ということを余り強調しようものなら、論敵が居直って『独仏年誌』当時にはまだこういうフォイエルバッハ式の発想をしていたのではないかといって具体的な証拠を突きつけてこないともかぎらない。そういう自覚があるものですから、マルクス・エンゲルスの文章は非常に微妙な表現で、巧妙な論争文になっております。」278-9P

「……………『ド・イデ』の論争的文脈で非常にデリケートな論点の一つが疎外論の扱いです。この問題を理解し、連続性と不連続性を見定めるためには、シュティルナーがど

ういう論理でフォイエルバッハやその亜流を批判したか、マルクス・エンゲルスはそれに対してどういう論理構成で応戦しているか、大枠だけでも押さえておくことが先決要求になります。」 279P

五 望月理論について(上)

「望月氏は『ド・イデ』の第一篇には、二つの歴史理論が混在ないし並存していることを分析され、御存知の通り、それらをマルクスとエンゲルスとに振り当てられる。「分業展開史論」がマルクスで、「所有形態史論」がエンゲルスというシェーマになります。」 280P

「さて、それではマルクスとエンゲルスとの「持分」に関する望月氏の処理は正しいか？結論から先にいえば、文献学的次元でみても、『ド・イデ』第一篇の「持分」の処理に関しては、私は基本的な部面で望月氏の認定に賛成することはできません。／「持分」を区別することは勿論必要です。しかも、単に筆蹟だけで分別するのではなく、——筆蹟だけでいえば大部分がエンゲルスですが、清書稿の場合もあるわけですから——内容面なども勘案して弁別する必要がある。こういう作業を望月氏が試行されたことは、私とて高く評価します。しかしですよ、分業展開史論はマルクスという望月氏の認定は根拠薄弱というよりも、はっきり言って、非常に無理なのです。」 280-1P

「実際、氏は『現代の理論』（一二二号、三九ページ）での座談会などから判る通り、口実筆記説を採っておられるわけです。」 281P

六 望月理論について(下)

「私なりにマルクスとエンゲルスの——『ド・イデ』『ド・イデ』以前の時期の——著作や論稿を検討した結論では、内容面、つまり、論材や論点からいっても、氏のいわれる「分業展開史論」を含む部分(基底原稿の後半部)はやはりエンゲルスに帰属させるのがナチュラルだと思います。」 285P

七 物象化論への視点(上)

「柴田高好氏が提起された論点をはじめ、たしかに色々問題があると思います。しかし、この国家論の問題は『ド・イデ』に即して議論する場合、マックス・シュティルナーの“無政府主義”思想との対決の文脈で考える必要があり、当然にまた、共産主義論といいますか、革命論の問題とも併せて検討する必要があるわけです。・・・・・・」 286P・・・・マックス・シュティルナー発の国家＝幻想共同体規定をマルクスが展開していたことの押さえと、その後消失した問題の押さえ

「・・・・・・『ドイツ・イデオロギー』における疎外論の処理ということを理解するためには、とりわけマックス・シュティルナーとの関係を念頭におく必要があります。」 287P

「・・・・・・彼としてはあの「唯一者」つまり生身の個人の立場に立つわけで、実はフォイエルバッハ流の「人間」、「類的存在としての人間」なるものを神の別名にすぎないと言って批判し、そういう主体＝実体の自己疎外という想念を批判しているわけです。」 288P

「・・・・・・あれはものすごい皮肉なのです。つまり、シュティルナーは「人間」を批判して生身の個人たる唯一者の立場を云々しているけれども、そして「人間の自己疎外」を批判しているけれども、結局「創造的無」＝「唯一者」という名の「人間」の自己疎外ではないか。シュティルナーは生身の具体的な個々人に定位したつもりでいるけれども、実質的にはそれは全く抽象的な個人であり、所詮は抽象的な「人間」にすぎないではない

か。こういう含みでの皮肉というか揶揄なのです。」 288P

「人間の「類的本質」に対してシュティルナーのように「個の実存」の立場を対置しただけでは、彼がフォイエルバッハに加えた批判、つまり、「神」に「人間」を対置したつもりでも「人間」とは結局「神」の別名にすぎないという批判の論理がはね返ってくる。／マルクス・エンゲルスはこのことを対自化し、ヘーゲル学派の疎外論の論理構制そのものを端的に超克しつつ、新しい地平、物象化論の地平を拓いているわけです。」 288-9P

八 物象化論への視点(下)

「ヘーゲル左派の展開過程を大雑把に言えば、フォイエルバッハまでのところで、神的な絶対精神が自己疎外して人間になるのではなく、逆に人間が自己の類的本質を疎外して神を定立するのだ、という逆転がおこなわれていたことは御存知の通りです。これに対して、ヘーゲル左派の掉尾(ちょうび)をかざるシュティルナーは、そういう逆転だけでは駄目だということ、何かしら普遍的な存在者である主体＝実体の自己疎外という論理そのものを止揚しなければならないということ、これを一応指摘したわけです。つまり、一応のところではいえば、シュティルナーの段階で疎外論の批判がおこなわれたことになります。／しかし、『ド・イデ』段階でのマルクス・エンゲルスはシュティルナーの遂行した主体概念の転換、つまり、類的＝普遍的な本質存在としての人間から個的＝実存としての人間＝個体への転換では駄目だといって批判するわけです。神＝幻像、「人間」＝真実在という定立に対して、「人間」＝幻像、「唯一者」＝真実在というシュティルナーの立論は、第三者的にみれば確かに新段階を意味します。が、普遍的・本質的存在を主体化してしまうヘーゲル学派に対して、特個的・実存的主体を実体化してしまうシュティルナーのやり方では、同じ地平に立った反対定立でしかない。類的本質の実体化と同時に個の実存の実体化をも批判的に斥けつつ、人間存在の事実態に即さねばならない。シェーマーティシュに言えば、そういう態度設定になると思います。」 289-90P

「尤も、ヘーゲル学派では、もともと、類と個、本質と実存とが固有の仕方で統一されていたわけですし、フォイエルバッハにせよシュティルナーにせよ、それなりに具象性をもたせて人間存在を考えているのですから、具体的・現実的な人間をとすることを押出しただけでは済まない。単に社会性を具体的に規定してみただけでは、ヘーゲル学派の地平を超える所以には必ずしもなりません。まさに論理構制、いや、存在論的了解の構えそのものを一新する必要があるわけです。」 290P

「・・・・・・第三者的にみれば彼ら(マルクス・エンゲルス)はまさにそれを遂行することによってヘーゲル学派の地平を蟬脱したのであり、そのことにおいて、実は、近代哲学の地平を超える所以となったわけです。」 290P

「詳しい話は省きますけれどもヘーゲル左派の連中は、神にせよ、政治権力にせよ、貨幣の威力(財産の威力)にせよ、人間の本質力の疎外態ということで一応説明した。それに対して、シュティルナーになりますと、そういう「人間の本質」なるものがそもそも仮想的な存在なのであり、そういう主体的「本質」が自己疎外をおこすわけではない、という議論になる。が、一切合財を幻想・幻影といってきめつけただけでは、日常的意識にとって超人間的・超自然的な威力をもった存在として思念されているものの秘密を解いたことにはならない。ヘーゲル左派の連中が解こうとした問題そのものは残るわけで、シュティルナ

一の議論では課題の放棄でしかない。という次第で、エンゲルスとしては旧来の問題に対して疎外論とは別途の論理構制で答えようと試みた。／そこで、従来「人間」の「類的本質」という仕方で表象されていたところのものを——ヘスが既に「協働」とか「交通」とかいうことで把え返していたのを承けるかたちで——分業的協働に即して規定し直すことが、一つの鍵になったわけです。パリ時代までのマルクスは、社会的分業というものを私有財産制のもとにおける、類的自己活動の疎外態として了解しておりましたので、分業というものは疎外的な一結果として位置づけられていた。ところが、今や、分業という動態的な社会関係の方を説明原理としつつ、一方での「人間」的本質も他方での「唯一者」の実存をも定位し、ヘーゲル左派が「疎外態」ということで説明しようしていた問題の内実、つまり「神」「国家」「法」「財産」等々を新しい方式で究明してみせることになったわけです。」290-1P・・・ヘスの協働概念と役割分掌の固定化としての分業と「共同幻想体」の現出

「具体的な経緯としては、シュティルナーが労働の自由化を云々したのに対して固定化された分業的労働そのものの止揚を対置するとか、シュティルナーが幻想共同体として国家を云々したのに対してその幻想的共同性の根拠を指摘してみせるとか、論争的な文脈で理解する必要があります。けれども……、またマルクスとエンゲルスとの微妙な差異といったことも分析する必要がありますけれども、当座の議論ではそこまで立入らなくてもいいでしょう。」291-2P・・・シュティルナーの国家=幻想共同体規定。分業によって「決定」から排除されることによって幻想共同体になるということ。

「ともあれ、『ド・イデ』ではヘーゲル左派および「真正社会主義」とのトータルな対質を通じて、疎外論がよって立つ主体=実体の論理構制、さかのぼっていえば「主体—客体」の論理構制そのものを超克しつつ、新しい世界観的地平が拓かれるに至っているということ、——詳しくは岩淵慶一氏への反批判(雑誌『情況』)で書き進めておりますが——私としてはこの次元に留目する次第です。」292P

九 新編輯版の意義

「私自身に関していえば、『ド・イデ』の内容面についてはこれまで立入った議論を控えてきたのですが、それというのも、まずテキストを公刊したうえでないと、勝手なことを強弁していると疑われる危険を怖れたからなのです。・・・・・・」293P

「・・・・・・私としてはこれで決定版だとは毛頭考えておりません。・・・・・・私のは試案だというのが自己規定です。」293P

「しかし、人間のする作業ですから——至らない諸点は御叱正を得て是正していきたいと思います。／河出書房版によって、『ド・イデ』については従来見えなかったいろいろな事柄が見え易くなり、マルクス主義研究が新展開を遂げること、今は唯これを希うのみ、といった心境です。」295P・・・廣松さんのこの編輯・訳に関していろいろ批判が寄せられているのですが、これが応答になると思います。これは、共時的・通時的協働作業なのだと思います。

【附】『ドイツ・イデオロギー』手稿復元版を編んで

とばしい正確な資料

「・・・・・・マルクスの発表した著作はむしろわずかであって、彼の思想は膨大な遺稿

やノートに埋もれている。従って、マルクスの思想的全体像を復元しようと思えば、遺稿やノートを研究することが是非とも必要である。」296P・・・新MEGAとして世界的協働作業として進行中です。

手稿断片の扱いに問題

「だれが加筆……」も復元

「あえて一言を許されるならば、唯物史観ならびに共産主義理論の確立に際して、第一バイオリンをひいたのは、従来の通念とは逆に、むしろエンゲルスであったという筆者年来の主張が(拙著『エンゲルス論』および『マルクス主義の成立過程』参照)、このたびの刊本により認証されると思う。一部の論者たちが、エンゲルスの行文にとまどって持ち出した口述筆記説のごときは、手稿の状況をリアルに再現してみればとうてい維持できないはずであるからである。」299P

(編集後記)

◆200号までの月一と現態勢を考えています。201号から新しい態勢に移行します。学習から宿題の執筆に軸を移しています。

◆巻頭言は、200号まで草稿を書いています。で、書いた時期と発表する時期がずれてきています。ときどき、調整をしています。今回はしないまま、そのまま出します。長く、永田町政治は「野党共闘」の時代で、野党的なことを残している政党の批判は差し控えるとなっていました。今回も、原稿を出すかどうかを最後まで迷っていたのですが、今野党は、沖縄県知事選の敗北で底を打ったように思えます。この時期に、底から這い上がるために、きちんとした「反省・撤回・謝罪」から入っていくときだと押さえての提起です。とらえ返しのキーワードは反差別ということです。

◆読書メモは、長く積ん読していたファシズム論の基本文献になっている『夜と霧』。そして、[廣松ノート]でそもそも最初に読んでおくことだった「マルクス主義三部作」の『マルクス主義の成立過程』です。次回と二回に分けての掲載です。

◆沖縄県知事選は敗北に終わりました。SNSでの膨大なデマの流布ということが、兵庫県知事選、宮城県知事選、自民党総裁選から総選挙に続いて起きているという指摘があります。確かにその対策が必要で、その構図を暴いていく作業も必要なのですが、そもそも、経済を軸にした表面的な政策論争になると、権力と金をもっているものに負けるのです。経済論争をするのなら、もっと深いところから、利害関係を明らかにしていくことですし、そもそも極右的なことが隆起してくるときは、保守を超えて、社会を変えていく勢力・左派にとって、正念場の飛躍のときのはずです。

反障害－反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られていますが、そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としなが議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害－反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>